

平成21年度 第1回 泡瀬地区環境利用学習推進連絡会を、平成21年7月28日(火)に沖縄市上地郷友会事務所にて行いました。

<出席者名簿>

平成21年度 泡瀬地区環境利用学習推進連絡会名簿

区分	名称・氏名	備考
専門家	エコ・ビジョン沖縄 藤井晴彦	
専門家	海の自然史研究所、琉球大学非常勤 藤田喜久	
専門家	沖縄国際大学 江上幹幸	
団体	泡瀬復興期成会	
団体	社団法人沖縄県建築士会沖縄市支部	
団体	沖縄こども未来ゾーン運営財団	欠席
行政	中城湾港出張所	
行政	中城湾港建設事務所	
行政	沖縄市環境課	
行政	沖縄市教育研究所	
行政	沖縄市立郷土博物館	
行政	沖縄市東部海浜開発局 計画調整課	

泡瀬地区環境利用学習推進連絡会会則

(総則)

第1条 本連絡会は、泡瀬地区環境利用学習推進連絡会と称する。

(目的)

第2条 泡瀬地区における環境学習を継続・発展させるために、関係する機関・団体等で定期的な会議を持ち、情報や人材等の相互提供できるような連携体制を築くことを目的とする。

(構成)

第3条 本連絡会は、基本的に泡瀬地区における環境利用学習に関係する別表に掲げる機関・団体等で構成する。

2 本連絡会を構成する専門家や機関・団体等は、必要に応じて承認を得て追加できるものとする。

(活動内容)

第4条 本連絡会の目的を達成させるために次のことを行う。

- (1) 環境利用学習の啓発及び実践促進
- (2) 環境利用学習プログラムの利用促進
- (3) 環境利用学習運営の検討
- (4) その他本会の目的達成に必要な事項

(会議及び運営)

第5条 会議は、必要に応じて開催するものとする。

2 会議の進行役は、沖縄市東部海浜開発局計画調整課長とする。

3 計画調整課長は、会議を招集するものとする。

4 沖縄市東部海浜開発局計画調整課は本連絡会の専門家や機関・団体等と連携して、本連絡会の運営を行う。

附 則

この会則は、平成17年8月5日から施行する。

平成21年度 第1回 泡瀬地区環境利用学習推進連絡会

会次第

日時：平成21年 7月 28日（火） 15：00～

場所：沖縄市上地郷友会事務所

委嘱状の交付

- (1) 開会
- (2) 20年度の確認
- (3) 上地郷友会でのパーク見学
- (4) 閉会

添付資料一覧

- ・ 第一回泡瀬地区環境利用学習推進連絡会会次第
- ・ 泡瀬地区環境利用学習推進連絡会名簿
- ・ 泡瀬地区環境利用学習推進連絡会会則、変更点对応表
- ・ 江上幹幸委員 略歴
- ・ 平成20年度泡瀬地区環境利用学習推進連絡会提出テーマ図
- ・ 上地誌抜粋、郷土資料館報告書「上地のパーク作り」抜粋

<泡瀬地区環境利用学習推進連絡会会則変更点>

(旧)

第3条 本連絡会は、基本的に泡瀬地区における環境利用学習に関係する別表に掲げる機関・団体等で構成する。

(新)

第3条 本連絡会は、基本的に泡瀬地区における環境利用学習に関係する次に掲げる者のうちから市長が委嘱し、又は任命・依頼する。

- (1) 学識経験者
- (2) 地域団体
- (3) 行政
- (4) その他市長が必要と認める者

(旧)

第5条 会議は、必要に応じて開催するものとする。

- 4 沖縄市東部海浜開発局計画調整課は本連絡会の専門家や機関・団体等と連携して、本連絡会の運営を行う。

(新)

第5条 会議は、必要に応じて開催するものとする。

- 4 沖縄市東部海浜開発局計画調整課は本連絡会の学識経験者や機関・団体等と連携して、本連絡会の運営を行う。

○概要

第1回で上げられた意見

会則の変更について

問題なく了承されました。

上地のバーキについて

博物館：冬キャベツの出荷にあわせてその入れ物としてバーキを作っており、内地や朝鮮、台湾などへの出荷量の増加にあわせて入れ物の需要も拡大して行った。昭和5年には上地副業組合という組合まで出来て盛んにバーキを生産していた。竹が上地周辺で少なくなり倉敷あたりに採りに行ったりもしていた。

江上：北谷町のイレバンシ遺跡から出てくるバーキも編み方が同じに見える。(6000年前の遺跡)、漆で目止めもされているものも出ている。

期成会：沖縄市では知花や美里でも作っていた記憶がある。

インドネシアなどで見られる竹細工も編み方は良く似ている

どのように伝えて行くかの工夫が大事

竹を割るのはすごく大変、紙やビニールなど、扱いやすいもので体験させても良いのではないか

使えるものを作るか使い方まで考えて作らせるかしないと駄目ではないか

小学生とかに体験させる際の工夫を考えていく

世代に合わせた使い方、作り方、作品の使用方法の模索

匠の家の活用を考える上でこの事例を参考に出来れば良いと思う。

使い方を考えながらも一時期この場所で生活を支えてきた技術があることを伝えて行くことは重要。